

荒瀬豊の思想史研究

ジャーナリズム批判の原理

Study of History of Ideas of ARASE Yutaka :
Principle of Criticism of Journalism

根津朝彦

NEZU Tomohiko

はじめに

①思想形成

②ジャーナリズム論

③ジャーナリズム批判

おわりに

【論文要旨】

荒瀬豊（1930年生まれ）の思想をジャーナリズム概念とジャーナリズム史の観点から考察する。そこにはジャーナリズム・ジャーナリズム史を研究する意味はどこにあるのかという問いが含まれる。本研究は、初めてジャーナリズム史研究者である荒瀬豊の思想に焦点をあてたものである。具体的には荒瀬の思想形成、ジャーナリズム論、ジャーナリズム批判を通して検討する。

「①思想形成」では、荒瀬が東京大学新聞研究所において研究者生活を過ごす前史にあたる学生時代と新潟支局の朝日新聞記者時代に彼が「現実と学問をつなぐ」意識をいかに培ってきたのかをたどる。新潟の民謡を論じた「おけさ哲学」の分析とともに荒瀬の問題意識の所在を位置づけた。

「②ジャーナリズム論」では、主に戸坂潤と林香里のジャーナリズム論を参照しながら、荒瀬がジャーナリズムを単にマス・メディアの下位概念として理解するのではなく、両者にある緊張関係を考察したことを重視した。荒瀬がとらえたジャーナリズム概念とは、現実の状況に批判的に向き合う思想性を意味し、ジャーナリズムに固有の批評的役割を掘り下げたことを明らかにした。

「③ジャーナリズム批判」では、荒瀬の歴史上におけるジャーナリズム批判を具体的に検討した。米騒動において「解放のための運動」と新聞人の求める「言論の自由」が切り離される過程を荒瀬は読み込み、新聞の戦争責任と絡めて「一貫性ある言論の放棄」を見出した。荒瀬の敗戦直後の新聞言説の分析をとらえ返すことで彼のジャーナリズム批判の方法が論理の徹底性にあることを明示した。

最後に課題を挙げた上で、民衆思想を潜り抜け、知識人との距離感と諷刺・頓智への感度を有する荒瀬の実践的な批判性が、自己の知識人像とジャーナリズム思想を結びつける原理であったことを提起した。

【キーワード】ジャーナリズム史、ジャーナリズム、マス・メディアとの緊張関係、新聞の戦争責任、思想の批判性